

[2] 実際の授業づくりについて

◆運動場面

はじめに

運動場面は、「からだづくり」の取り組みの中で直接、身体に働きかける場面である。高等部の生徒は、あらゆる取り組みの基礎となる「からだ」そのものについて、多様な発達の過程を通して現在に到っており、その障害の克服は容易ではない生徒が多い。我々は、この現状を直視しながら次のようなねらいをもって指導してきた。

身体諸機能の改善をはかり、身体を動かすことの喜びを体得させ、運動技能の向上をめざす。運動経験の積み重ねと運動の習慣化を図り、社会参加、生涯スポーツにつなげていく。

1. 保健体育科による実践

高等部の体育はA、B二つのグループで授業を行っている。二つのグループに分けた理由としては生徒の発達年齢に大きな幅（1歳4ヵ月～10歳）があることが挙げられる。また、同一教材複数課題で個々にアプローチするとき、技能面の向上と運動量確保の両立を図るにはできるだけ等質のグループが望ましいと考え、各グループそれぞれ週2単位時間の学習を重ねてきた。体育の授業で培いたい力としては①文化的遺産でもある運動そのものを主体的に楽しむ②生き生きとからだそのものを動かす③運動能力、運動機能の向上④集中して組む⑤めあてあて（目的意識）を持って取り組む、等が挙げられる。しかし、①～⑤までのすべてをねらって学習を進めていくのではなく、主に①の運動そのものを主体的に楽しむことによって②～⑤の力が自然と培われていくものと考えている。


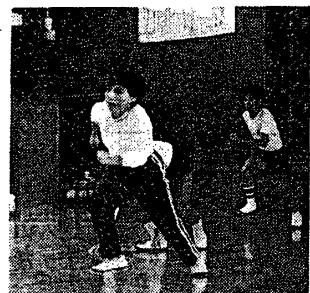
年々生徒の障害が重度重複化していく中で、実践内容も以下の表のように変わってきた。

[表2] 保健体育科における年次別実践内容表

●は研究紀要で実践を紹介した種目

	1年次	2年次	3年次	4年次
Aグループ (比較的障害が重い生徒のグループ)	<ul style="list-style-type: none"> ●陸上運動(短距離、リレー、長距離走) ●水泳 ●体操(縄跳び運動、リズム運動) ●ボール運動(サッカー、ビーチボール、バレー) 	<ul style="list-style-type: none"> ●集合、整列 ●基本の運動 ●水泳 ●縄跳び運動 ●手具を使った運動(棒、縄、ボール、輪) 	<ul style="list-style-type: none"> ●集合、整列 ●基本の運動 ●ボール遊び ●水泳 ●縄跳び運動 ●手具を使った運動(棒、縄、ボール、輪) 	<ul style="list-style-type: none"> ●集合、整列 ●基本の運動 ●ボール運動(バスケットボールリレー、ボール遊び) ●水泳
Bグループ (比較的障害が軽い生徒のグループ)	<ul style="list-style-type: none"> ●短距離走 ●ハンドボール ●バスケットボール ●ビーチボールバレー ●卓球 ●水泳 ●体操、器械運動 	<ul style="list-style-type: none"> ●陸上運動 ●水泳 ●バスケットボール ●サッカー ●体操 ●卓球 	<ul style="list-style-type: none"> ●短距離走、リレー ●水泳 ●長距離走 ●バスケットボール ●体操 ●卓球 	<ul style="list-style-type: none"> ●短距離走 ●水泳 ●ソフトボール ●バスケットボール ●卓球

• 本年度の実践（取り組み）

	A グループ	B グループ
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> 全生徒が楽しみながら生き生きとからだを動かすようにし、健康を保持、増進させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 運動の持つ楽しさを味わわせ、少しでも進んで生き生きと運動することができる。 粘り強さや集中力を養い、かつ仲間と協力することによって社会性を養う。
方針と手立て	<ul style="list-style-type: none"> できるだけ全員が同一種目に取り組みめるよう細かくグループ分けをし、1時間の中で必ずグループ練習と一斉でのゲームができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自主性や自治力を高めるために、集団的スポーツでは自分たちで話し合ってルール作りをさせる。 見通しを持って運動ができるよう、具体的なめあてをできるだけ自分で設定させるようにする。
実践例	<p>— ボール運動 —</p> <p>種目名 — バスケットボールリレー</p> <p>準備物 — 各種ボール、ミニゴール×2</p> <p>内 容 — 2チームで競争をする。</p> <p>① ヨーイドンでスタートし、ドリブルもしくはボールを持ってゴールを目指す。</p> <p>② ゴール下の指導者に1回パスをし、またもらい受ける。</p> <p>③ シュートをし（入るまで）、ドリブル等で帰って次の人にパス（又はタッチをする。）</p> <p>練習方法 — 音楽に合わせてランニングをする。</p> <p>生徒を5グループに分けて実態に応じた練習をする。（パス、ドリブル、シュート等）</p> <p>変容例 ～H・Y（高2男）の場合～</p> <p>1時間目 — ボールを見ていると殆どボールが手につかず後ろなどにそらしたり、シュートはリングに届かなかった。</p> <p>11時間目 — ある程度強いパスでも取れ、シュートもリングまで届くようになった。</p> <p>考察及び今後の課題</p> <p>比較的障害が重たい生徒たちの集団であっても、実態に応じた練習をし、同じ内容に繰り返し取り組むことによって非常に楽しみながら生き生きとからだを動かすことができた。今後も学習を重ね、少しでも本格的なバスケットボールの試合形式に近づいていければと考えている。</p> 	<p>— 短距離走 —</p> <p>ねらい — 自然に爪先に力を入れて走ることができるようにする。</p> <p>スターティングブロックを使ってのスタートダッシュに慣れる。</p> <p>具体的指導内容</p> <ul style="list-style-type: none"> 追い抜き走 タイヤ引きリレー ハンデを付けた変形ダッシュ（室内） 物（棒、ボール）を持ってのリレー 等 <p>変容例（50メートル走）</p> <p>N・S（高3男） — 8"2 → 8"1</p> <p>M・T（高2男） — 10"5 → 9"9</p> <p>M・U（高1男） — 9"3 → 9"1</p> <p>H・T（高1女） — 13"0 → 12"6</p> <p>変形ダッシュではいつも一番遅く、やる気もなくしかけていたが、ハンデをつけて行ったらトップと競り合えるようになり、意欲的に取り組めた。</p> <p>考察及び今後の課題</p> <p>ダッシュの仕方も良くなり記録が伸びている生徒が多くなったが、逆にスターティングブロックの扱いに慣れず、記録が下がってしまった生徒もあった。今後は生徒一人ひとりの脚力を、もっと考慮して実践して行かねばならないと考えている。</p> 

2. からだづくり養訓（朝の活動）の実践

(1) これまでの取り組み

1年次は、保健体育科の拡充と運動経験の拡大と毎日運動を継続していく力の育成を目的として取り組みを始めた。この時は、A・B二つのグループにわかれ、Aグループは10分間走を、Bグループはドリブル走や変則ダッシュを中心にして取り組んだ。

2年次は、1年次の考え方をさらに発展させ、一人ひとりの実態や課題に応じた取り組みとすることとし、週時程の中に2単位時間をとった。この年は、10分間走と課題別トレーニングと農園の管理と組み合わせて取り組んでいた。課題別トレーニングは、身体の障害や運動の能力で6グループに分けて実施した。また、10分間走については変化を持たせるため校庭でのトラック走から校庭の周囲を走るよう工夫した。

3年次は、2年次の方針をほぼ踏襲しながら実践したが、活動を10分間走と課題別トレーニングに限った1単位時間の取り組みとした。また、課題別トレーニングのグループ編成の視点を運動機能の習熟度別によるものとし、5グループに分けた。

(2) 本年度の取り組み

①ねらい

- それぞれの課題に応じた運動をし、身体諸機能の改善を図る。
- 毎日、運動を継続することで、運動の習慣化を図る。

②方針と手だて

- 月曜日から金曜日まで一単位時間の帯の時間を設定し、前半にはグループ別に課題別トレーニングをして身体の機能を高め、後半には全員で持久力をつけるための10分間走を行う。
- 生徒の重度化に対応して、帯の時間を1校時から2校時へ変更し、ゆとりをもって活動に取り組めるようにする。
- 雨天時には、体育館で始めに課題別トレーニングをした後で、エアロビックエクササイズをする。エアロビックエクササイズは10分間走と同じように心肺機能を高める運動であること、有酸素運動としての効果が高いこと、生徒達が音楽に興味・関心が高いので楽しんでトレーニングができることから選んだ。

•課題別トレーニングについて

グループ編成の視点を「今もっている力を伸ばす」ことと、「身体諸機能で落ち込みのみられる部位の改善」をねらうことにし、それぞれの生徒の実態に応じた5つのグループを編成する。それぞれの生徒の課題について養訓担当講師のボディチェックを受けた上でどのグループに所属するかを決める。

•10分間走について

一人ひとりの意欲を高め自分のペースをつかんで走ることができるようになるべく指導者が伴走しないことにする。指導者はコースの途中に立ち、指示や応援をする。

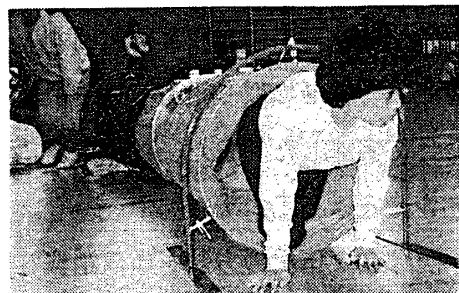
●課題別トレーニング〈1グループ〉

(1) 生徒の実態

本グループは、津守式乳幼児発達検査の運動項目において2歳前後という女子4名（内3名はてんかんを有する）で構成されている。従って認知力や身体意識、協応性等に大きな遅滞が見られ、粗大運動を楽しむ段階の生徒たちである。また、長期にわたって肥満傾向にあった生徒3名は身体、特に足に変形をきたしており、運動が過重な負荷とならないよう配慮する必要がある。

(2) ねらい

- 身体意識を育てる。
- 動的バランス能力の向上をめざす。
- 大筋群の協応性の形成を図る。



ファニートンネルを使って

(3) 方針と手だて

- 粗大運動を主とし、楽しく取り組ませる。
- 運動内容をある程度パターン化し、少しでも見通しをもって活動させる。
- てんかんを有する生徒が多いので、体調をよく観察しながら1対1で補助につく。

実施内容	ねらい	指導上の留意点
トランポリンで跳ぶ。	• バランス能力 身体意識の形成	体調を考慮し状態によっては中止する。揺さぶりから始め立位までもっていく。
ファニートンネルをくぐる。	• 身体意識の形成、筋力の育成	声かけで取り組ませる。繰り返す。
セラピーボールを使って腹臥、背臥になる。	• バランス能力 柔軟性の育成	生徒の表情を見ながら静的な状態から少しずつ動きを加える。支持を確実にを行う。



セラピーボールを使って

(4) 実践例（トランポリンでの変容）

—Sk・Y（高3女）の場合—

高1の実態	高2の実態	高3の実態
指導者の手を持って立位になれるが、少しでも揺れると倒れる。	指導者の手を持って一緒に40回ぐらい跳ぶことができるようになった。	指導者の手ではなく体育棒を握って50回以上跳ぶ。直接手を支えるとより高く跳ぼうとする。

(5) 考察及び今後の課題

他からの働きかけを喜びながら、いろいろな粗大運動に楽しく取り組んでいる。今ある運動能力を維持するためにも、肥満についての対策も並行して指導する必要がある。指示や補助によって活動に取り組む生徒たちなので、日々の体調や精神状態を十分に配慮し、過重な運動とならないよう慎重に、そして柔軟にプログラムを組んでいきたいと考える。

〈2グループ〉

(1) 生徒の実態

本グループは、男子4名(軽度精神発達遅滞で慢性腎臓疾患・上肢機能障害・脳性麻痺後遺症を持つ者各1名ずつ、情緒障害)、女子1名(軽度精神発達遅滞で肥満)の多種多様な障害を持つ生徒5名で編成されている。そのため、一人ひとりのねらいやトレーニングの内容は異なるが、障害の程度は比較的軽く、各自が必要な運動を理解し、自主的に運動に取り組むことができる。ただし、一つひとつの運動を正確にはできない生徒が多い。

(2) ねらい

自分に必要な運動を覚え、正確に行う。(家庭でも行えるようにする。)

K・O(高3男)——体調を考えながら、腎ネフ体操を行う。

H・Y(高3男)——下肢筋肉の強化と下肢筋肉・背筋の硬化防止

H・K(高2男)——上肢筋肉の円滑化と筋力アップ

H・O(高3女)・Y・N(高2男)——腹筋・背筋の強化

(3) 方針と手だて

- ・パターン化して、自主的に取り組めるようにさせる。(器具、補助具の活用)
- ・一つひとつの動きを正確に行うように声かけ、補助を行う。
- ・十分な負荷がかかる程度まで運動させる。

(4) 実践例—Y・Nの場合—

本生徒は身体全体が硬く、4月当初は、特に足首の後ろの筋肉が硬いことが問題点とされた。約3ヵ月間は足首の柔軟性を養うことをねらいとした運動を中心に、アキレス腱伸ばし—背腹筋及びアキレス腱の伸縮—背腹筋伸ばし—下肢筋肉伸ばし—胸の筋肉伸ばしの5種目に取り組ませた。

しかし、6月下旬に抽出養訓の担当者から足首の柔軟性だけでなく、身体全体の発達の遅れ、身体の未分化があり、特に腰ができていないことが問題だと指摘された。そのため、身体の柔軟性より、筋肉の強化、特に腹・背筋をつけていくことが必要だと考え、—腹筋10回—背筋10秒—腕立て伏せの姿勢保持(腕を伸ばした状態)10秒の3種目を1セットとして時間一杯繰り返し取り組ませた。最初は筋肉に力を入れる要領が分からなかったり筋力が不足したりしていたが、徐々に一人でどんどん進めることができるようになった。しかし、まだ、各運動は不正確で、特に腕立て伏せの姿勢保持は声かけや補助を必要とする状態である。



—腹筋をしているY・N—

(5) 考察及び今後の課題

生徒たちは、ほぼ自分一人で運動に取り組めるようになってはいるが、一つひとつの運動を正確

に行なうという点ではまだ不十分なところがある。また、運動の必要性を理解し、自発的・継続的に家庭でも実践できるところまでにはいたっていないので、意識付けていくことが大切だと考える。

〈3グループ〉

(1) 生徒の実態

本グループは、自閉症3名（内、重度1名）、弱視・構語障害1名、合計4名である。集団の中では、指示を理解し、適切に対応できないところがあり、1対1に近い対応を必要とする。

身体機能については、1名を除き障害は見られない。しかし、体力診断テストの結果等を見ると、特に腹背筋の柔軟性が乏しいことが目立つ。自らの意思で耐えたり、努力しようという気持ちが乏しいので、指導者は生徒一人ひとりがパニックを起こさないように配慮しながら活動を進めて行く必要がある。

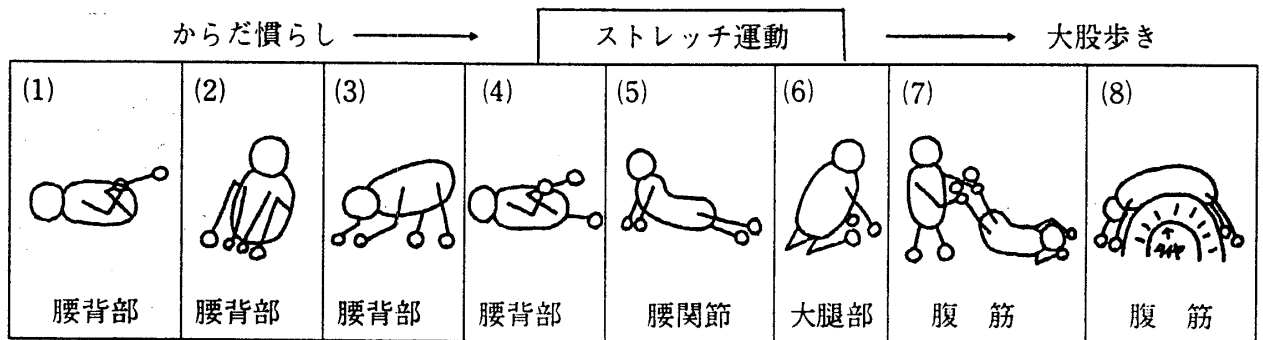
(2) ねらい

見通しを持って運動をし、主に柔軟性を高める。

(3) 方針と手だて

- ・指導者を2名とし、心のつながりを大切にしている。
- ・訓練内容を下記の実践例のように同じ形式で繰り返し、見通しを持って取り組ませ、精神的に安定させる。上記の2つの手だてにより運動の強化がしやすくなる。
- ・生徒たちが自発的に取り組むように意識づけをする。

(4) 実践例



変容例

	平成2年10月	平成3年7月
伏が上体そらし	25cm	29cm
我慢できる時間	約3分	3分以上
様子	一人で万歳の形で、黙ったまま続けられる。	黙って楽々と活動し、まだ続けられる。



自信を持って、タイヤの上だけでなく、背そらしができる物なら **背そらしをするM・T** 何を使っても運動ができるようになった。余裕を持って活動を行い、体も柔らかくなった。

(5) 考察と今後の課題

背筋の柔軟性だけでなく、腹部、腰部の柔軟性へとねらいを広げた。一人ひとりが見通しを持

つことができるようになるに従って進んで取り組めるようになった。指導者との心のつながりが強まるに従い、効果が上がりつつある。今後主体的に取り組む意欲を一層育てたい。

〈4グループ〉

(1) 生徒の実態

3年生1名、2年生4名、1年生2名の計7名よりなる。障害は多種多様であるが、全身的に筋力が十分には発達しておらず、直立姿勢が困難な生徒、長時間の立位が苦手な生徒、物を引っぱったり持ち上げたりするのが苦手な生徒など、まず筋力強化を図ることが望ましいと考えられる生徒たちで構成されている。2・3年生の5名は1年次より本グループに所属しており、継続的に筋力強化のための運動に取り組んできた。そのため、1年生に比べ1つひとつの運動に対して見通しを持って取り組み、自主性や持続性も出てきた。また、徐々にではあるが筋力がついてきている。しかし、運動能力テスト、体力診断テストの結果にみられる筋力の落ち込みの改善にまでには至っていない。

(2) ねらい

全身的な筋力強化を図る。

(3) 方針と手だて

- ・メニューをパターン化し見通しを持って取り組めるようにする。
- ・腹筋・背筋運動の回数、鉄棒のぶら下がりの秒数などは、各自の実態に合わせて目標を設定し、押しつけではなく目的意識を持って活動できるようにする。
- ・1つひとつの運動をできるだけ正確に行わせる。



手押し車姿勢の保持をするS・N

実施内容	ねらう筋力	指導上の留意点
腹筋・背筋運動	腹筋力、背筋力	ゆっくり、正確に行わせる。
腕立て姿勢の保持 (手押し車姿勢の保持)	腕力、腹筋力、背筋力	正しい姿勢がとれるよう常に声かけを行い、時には補助を与える。
鉄棒のぶら下がりなど	握力、腕力、腹筋力、背筋力	鉄棒の握り方に十分注意させる。

(4) 実践例 —K・S(高2女)の変容—

実施内容	1年次4月の実態	2年次10月の実態
腹筋運動	自分のズボンを引っぱりながら1～2回程度	後頭部に腕を組んだままで8回、腕を振り上げながらであれば15回程度
鉄棒のぶら下がり など	「こわい」と言ってなかなかしようとしな。すぐに手を放す。	進んで取り組み10秒はぶら下がる。前回りができるようになる。

気分がムラがあり、昨年4月当初はなかなか運動に積極的に取り組めなかったが、繰り返しの活動により自分の記録が伸びてくると積極的に取り組み出し、更に記録が伸びてきた。

(5) 考察及び今後の課題

単調になりがちな筋力トレーニングだが、各自なりに目標を持って継続して取り組んだ結果、筋

力強化が図られてきている。場の設定がなくとも、日常的に自分から取り組むようになってほしい。

〈5 グループ〉

(1) 生徒の実態

男子6名、女子2名の比較的障害の程度の軽い生徒のグループである。言語による指示が通り、特別な身体の障害のある生徒はいない。それでも、運動能力テストや体力診断テストの結果でみると、筋力や調整力が劣っている。特に筋力では、足の指でふんばったり、上肢を使って押したりする力が弱く、また、調整力では協応性や巧緻性に欠けている。これは発達の遅れとともに運動の経験が不足しているためであると考えられる。

(2) ねらい

- 手具を使って、主に調整力や目と手の協応性を高める。
- 上肢やつま先の筋力を高める。

(3) 方針と手だて

指導内容	ねらい	指導上の留意点
ボールを使った運動 1人 ・ドリブル（その場で、歩く走るダッシュ、2こを同時に） ・ボールまわし（首、胴、足、8の字） ・ボールキャッチ（なげ上げ、背中キャッチ、股下） 2人 ・パス（2このパス、ボールわたし） グループ ・シュートゲーム・ゲーム	・ボールの感覚になれ、巧緻性を高める。 ・体の柔軟性や巧緻性を高める。 ・目と手の協応性を高める。 ・目と手の協応性や巧緻性を高める。 ・楽しんで運動する習慣をつける。	・バスケットボールを使うが、握力の弱い生徒にはドッチボールでさせる。 ・「チャレンジ」と名付けた新しい動きを取り入れる。 ・できるようになった動きは、より早くできるようにさせる。 ・自分でいろいろな動きを工夫させ、他の生徒にも紹介する。 ・同じような力の生徒同士を組み合わせる。 ・まっている時間などにも自主的にするように指導しておく。
力だめしの運動 ・棒押し、棒引き、人運び ・馬跳び、パービー ・手押し車、補助倒立	・上半身の筋力や足先の力をつける。	・2人組にしたり、グループで競争したりして、単調にならないように配慮する。

(4) 実践例 —N・S（高3・男）の例—

指導内容	4月の実態	9月の実態
ボールを使った運動	あたらしい動きがうまくできず、挑戦しようという意欲も弱かった。	背中キャッチがうまくできるようになると、他の新しいことにも進んで挑戦し、自分なりの動きも考えた。
力だめしの運動	棒押しでは、すぐに押されて粘りがなかった。	姿勢を低くしたり、かかとを上げたりして工夫しながら動いている。

(5) 考察及び今後の課題

ボールをつかった運動は楽しんでしている。「チャレンジ」と名付けた新しい動きにもだんだん慣れてきている。力だめしの運動は多少きつようなのだが、みんな汗がでるほどがんばっている。短い時間であるのでゲームの時間がなかなかとれないが、休憩時間などと結びつけることにより、自主的な運動習慣を育成したい。

●10分間走

(1) ねらい

- 走ることの意識向上を図り、一人ひとりが自主的に決めたためあて（目標）に向かって努力する態度を養う。
- 根気強さを養う。
- 呼吸循環機能の向上を目指す。

(2) 主な内容

晴天時……………10分間走

雨天時……………エアロビックエクササイズ（体育館にて）

(3) 方針と手立て

- 個々の精神面・走力の実態に応じて、声かけ、励まし、賞賛、めあての具体化、スタート位置の工夫等を心掛けるようにする。
- 伴走はできるだけおこなわないようにする。（今年度から）
- 1周300メートルのコース半周（150メートル）走るときに竹串を1本ずつ渡し、貰った竹串の本数が自分の記録（評価）となる。
- 基本的に2週間（約10回）単位で各自のめあてをチェックし、続けて達成できていれば、少しずつめあてを上げていく。
- 生徒の実態に応じた評価をし、どの生徒もめあてにむかって、意欲的に取り組めるようにする。

(4) 実践例（全体の取り組み・変容例は昨年度の研究紀要第12集で取り上げているので、今年度は個人の変容例を取り上げることにする）

全体指導の中で、長距離を走ることをあまり好んでいなかった生徒が、やる気を持って10分間走に取り組んでいった例を紹介する。

氏名……………H・Y（高2男）

障害名……………プラターウイリー症候群

体格……………身長146.4cm 体重43.5kg ローレル指数133（H3.10.4現在）

行動・特性……………・自分を正当化しがちである。

- 指導者の見ていないところでは自分を追い込もうとしない。
- 根気強く取り組もうとする場面はあまり無いが、何かに夢中になると、時間や場所を忘れてしまうほど集中する。

持久走タイムの変容（1500メートル）

H2. 4月（運動能力テスト） 10分12秒

H2. 5月（校内マラソン大会）10分30秒

H2. 11月（校内マラソン大会）11分50秒

- H 3. 5月 (校内マラソン大会) 9分26秒……自己ベスト
 H 3. 9月 (運動能力テスト) 10分30秒
 H 3. 10月 (校内マラソン大会) 9分16秒……自己ベスト更新

本生徒の獲得した竹串の本数の変容 (平成3年11月7日までの記録)

- H 2 1学期 平均7、7本 (めあて達成率44%)
 2学期 平均7、8本 (めあて達成率57%)
 H 3 1学期 平均8、7本 (めあて達成率62%)
 2学期 平均8、9本 (めあて達成率29%)

注 平成2年度の本生徒は、落ちている竹串を拾ったり、友達竹串を奪って自分の本数に加えたりし、正確な本数がはっきりしないことが多かった。しかし、平成3年度はそのようなことは一度もなく正確な記録が残っている。

(5) 考察及びまとめ

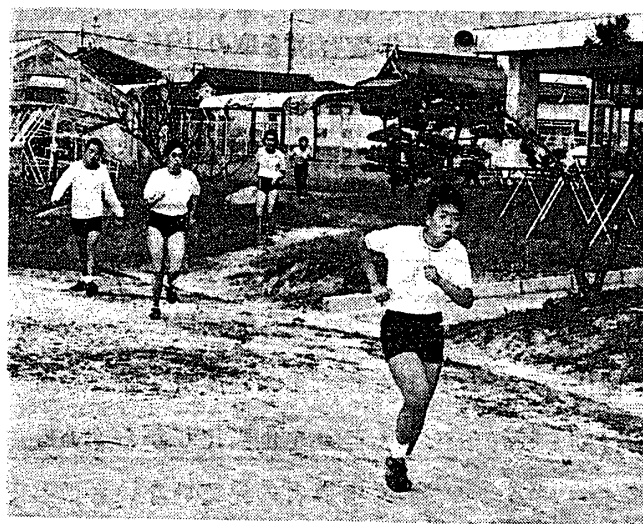
本年度はこれまでの実践の上にならって、生徒の自主的な走る意欲を育てることをねらいとしてきた。事例として取り上げた生徒は、今年度になって10分間走に意欲的に取り組むようになった。その結果、マラソン大会では自己ベストを出すなど精神的・肉体的に強くなっている。このような変容は、他の生徒にもたくさんみられる。

これは、課題別トレーニングで十分に身体をうごかしていること、めあてを自分で決めさせたこと、指導者が伴走するのではなく、コースの途中にならって励ましなど声かけをしたこと、具体的な評価方法をとったこと、などによる成果である。

ただ、自閉的傾向のある生徒や障害が重い生徒については、いろいろな課題を残しており、これらの生徒に対しても、同じように意欲を持って意欲的に取り組ませることができるよう、今後も内容を改善していきたい。



米子まで走ろう



一生懸命がんばるH・Y

◆生活場面

はじめに

ここでは、職業科の学習を通してのからだづくりの実践を取り上げてまとめることにした。「働くことを学ぶ場」である職業科の学習では、**作業を遂行する技能**はもちろんのこと、**作業態度や意欲**の向上を主としてねらっている。また、**社会との関わり**を意識させる中で、自分も社会の一員であるという自覚や責任感を促すという、職業科ならではのねらいも持っており、他の場面よりも一層に社会参加（＝社会的自立）を意識した実践が行われている。

職業科におけるからだづくりでは、運動場面で培われたからだ（身体そのものが発達し、機能も向上したからだ、すすんで取り組もうとする意欲のあるからだ）を基礎としながら、そのからだの使い方（身のこなし方）を体得して、「働く場」でも、すすんで生き生きとからだを働かせるようになることをねらっている。また、他の学習場面ではあまり使わない身体部位を動かせる機会が多く、「働くこと」そのものが、身体諸機能に刺激を与えて発達を促し、身体全体をつくる上にも効果的であると考えられる。さらには、社会の営みにより近い場面で培った自信や意欲が、全ての生活場面での自信や意欲を引き出す原動力となり、気力に溢れた生活者「すすんで生き生きとからだを動かす子」の形成をより一層促すと考えている。

このようなねらいを達成するために「働く」ことのもつ要素を細分化し、職業科の「めあて」を次のように定めて研究実践をすすめてきた。

- (1) **自発性** 自分から作業にかかわり、意欲的に行動する自主性を培う。
- (2) **情緒の安定** 周囲の状況に合わせて、自分の要求や欲求、感情等を調整する力を育てる。
- (3) **持続性** 与えられた生産教材に対して根気強く取り組み、生産の喜びにまで高める。
- (4) **表現力** 友だちや先生に自分の考えや意思、要求を表現できる力を育てる。
- (5) **見通す力** 生産（製作）の過程で「納期」等を理解し、目的を見通す力をつける。
- (6) **確実性** よりよい製品を注意を集中して正確に作りだしていく力を育てる。
- (7) **作業速度** 自分なりのめあてにむかって能率よくたくさん作る力をつける。
- (8) **操作力** 道具や機械を操作する力の向上をめざす。
- (9) **判別する力** 不良品がわかり、不良品を自分で判別して抜き出すことができる力を育てる。
- (10) **創意性** 作業の中で、道具を工夫したり選んだり、自ら判断する力を育てる。
- (11) **理解力** 指示を正確に理解して、指示通りに実行に移すことのできる力。
- (12) **責任感** 実社会との関わりを意識して、自分の作業工程に対して責任をもって取り組む力を育てる。

なお、この場面での評価は、社会参加を考慮しての好ましい作業態度（自発性、情緒の安定、持続性、表現力）と、作業に関わる基本的な技能（確実性、作業速度、操作力、判別する力）の両面で行う。今年度は「職業科における評価の基準表」の成案を得ることをこの場面での研究の柱とした。

1. 職業科による実践〈作業1コース〉

(1) 生徒の実態

本グループは男子3名（自閉症2名、小人症1名）のグループである。自閉症のうちH. Mは普段は情緒が不安定なことが多く指示が通りにくい、作を運んだり草をぬいたりする作業は好きである。あと一人のT. Oは、基本的な作業の習慣がまだできておらず、特に指先の力が弱いため細かい作業が苦手である。小人症のT. Mは指示は良くわかるが、指先が器用でなく作業の継続時間が短い。

(2) ねらい

- 少しでも長い時間、作業に取り組めるからだと態度の養成。
- ごく簡単ではあっても見通しをもって作業にあたる力をつける。
- 情緒の安定をはかり、社会適応の力をそだてる。

(3) 方針と手だて

生徒の実態から落ち着いて作業に取り組ませるために、屋外の伸び伸びとした雰囲気の中で粗大運動的な身体全体を動かすような作業がのぞましいと考え、農園の草とり、草はこび、水やり等の作業内容とした。

なお、戸外の作業であるため天候に左右されやすい。そのため雨天時や季節的に農作業のない時には、屋内での軽作業を行なうことにした。軽作業の内容は導線のビニールはぎである。

指導の方針として、

- 草はこび、水はこびなどの粗大運動を多くする。
- 草取り、導線のビニールはぎなど指先の力をつける。
- 作業内容を単純化し、くり返し行うことを大切にして作業の見通しをつける。

ことにした。

また、個別に次のような方針をたてた。

H. Mについては、ある程度の作業を独りでする力をつけたい。たとえば、水をくんできて、芋畑にまくという作業をひとつのかたまりの仕事としてできるようになってほしい。そこで、道具（バケツ）を用意する、水道のところまでいく、水をだす、止める、畑まではこぶなどと作業の内容を細かく分ける。始めのうちは、そのひとつひとつの作業ごとに声かけや必要な補助をする。そしてできたところから、声かけも補助もはずしていくなどの手だてを考えた。

T. Oは、基本的な作業態度をそだてることが目標である。そのため一つひとつの動きを補助したり、声かけをすることによって意識を作業から離れないようにさせていく。たとえば、温室の草をぬいている時には、手をそえて指を使って草をぬくことを指導し、できるようになったら手をやすめないでするように声かけをする。



プランターを洗っているT.M

T・Mについては、作業の継続を大きな目標とする。まわりのことがよく理解できるだけにいろいろな作業に手を出そうとして、自分のしごとをおろそかにしてしまうことがある。自分の仕事を最後までやりぬくこと、他の人のまねをするのではなく自分のやり方に自信をもつこと、おそくてもよいからていねいにやることなどを実際の作業を通して指導していく。

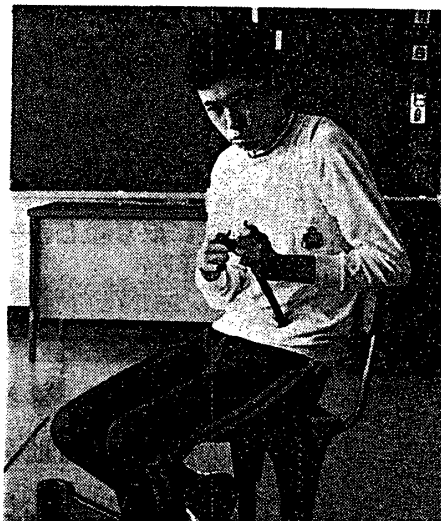
(4) 実践例

	農 園	温 室	軽 作 業
T・M	<ul style="list-style-type: none"> ・4月は道具をあれこれ用意して使おうとしていた。だが、作業能率が悪いので今はほとんど手作業になった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・4月は自信がないのかあちこちうろついて人のすることを見ていた。今は決った区画の草取りができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・指先の力がないので、量は多くないが、ていねいにやろうとしている。 ・他の生徒のことが気になり、自分のことがおろそかになりがちである。
H・M	<ul style="list-style-type: none"> ・草取りは集中して取り組めるが、その時間が短く土遊びになることがある。水運びはとてもよくできた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・場所が狭いこともあってやることの範囲が見えているため、畑より集中時間が長くなっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・力があるのでどんどん導線のビニールの皮をむくことができる。 自信がついてきていて、ほとんど一人でできる。
T・O	<ul style="list-style-type: none"> ・指がよごれるのをきらうので、主に水運びをした。回数が多くなり、一人ではこべる距離がだんだん長くなっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者がついていて指示を出していれば草取りを続けられるが、一人では、手が止まってしまう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・指示はよく聞いて、やろうとはするが、手の使い方が上手でないので手をそえながら練習している段階である。

(5) 考察および今後の課題

人数が少ないので、それぞれの能力に応じた対応ができたように思う。自閉的傾向の2名は何か作業をしている時は情緒が安定していることが多く、指示によって物を運ぶ、草をとるなどの作業の力もついてきた。ただ、作業の見通しをもてないので、指示がないと動かないという問題を残している。

もう1名は、作業の継続に力を入れてきた。だいぶ改善されてきたが本人が自覚して取り組むことは少ない。残された時間で自分の仕事を自信をもって最後までやるよう取り組む態度を育てていきたい。



導線のビニールの皮をむいているT・O

〈作業2コース〉

(1) 生徒の実態

1年2名、2年1名、3年2名、計5名（男子1名、女子4名）で編成されている。この中には、ダウン症1名、てんかん2名、重複障害を有するもの1名を含み、障害も重いほうのグループである。5名とも身辺処理が確立しておらず、学習中の排泄、移動等に介助を必要とすることが多い。全体的に指示が通りにくい、繰り返し学習してパターン化されたことであれば、自分なりに見通しを持って取り組もうとする。2、3年の3名は、昨年度から紙作業に取り組んでおり、ある程度見通しを持って取り組めるが、働くという意識は低く、体調や情緒の状態、作業内容によって取り組み方も左右される。

(2) ねらい

- 自分なりに見通しを持って、自発的に作業に取り組む。
- 働く意識を少しでも高める。
- あいさつ・報告等により、表現力を養う。

(3) 方針と手だて

生徒の実態より、①一定の場所に座ったまま、手を動かすだけで行える、②一つひとつの工程は単純であり、その工程を繰り返すことによって作業の完成が目に見える、③一つの作業を完成するのに長時間を要しない、④一人ひとりに合った方法で作業に取り組むことができる、という特性を持った「紙工（段ボールの型抜き）」を行うことにした。

そして、次のような指導方針で、毎時間の指導に当たった。

- 見通しを持って作業に取り組む——毎時間同じ活動を繰り返す。

← 5分 →	← 60分 →	← 10分 →	← 5分 →
あいさつ・準備	作業・報告	後片付け・掃除・運搬	反省会・あいさつ

- 働く意識を養う——指導者が模範となって作業をし、働く雰囲気を作る。そして、指導者は、作業の手を途中で止めたり、不良品を出したりしないように適宜声かけをする。
- 表現力を高める——各自の実態にあわせて、作業が完成したり不良品を出したりした時の報告、作業の始めと終わりのあいさつ、作業中の返事などをさせることにより、少しでも表現力を高める。
- 意欲的に作業に取り組む——各自の実態にあわせて、何枚か完成する毎に“がんばり表”にシールを貼っていく。そして、毎時間の作業終了後に、シールの枚数をもとに作業量や作業態度について一人ひとりの評価をする。
- 作業のやり方が分かり、ある程度見通しを持って取り組めるようになるまでは、1対1に近い形で指導し、声かけや介助をするようにする。
- 発作等の関係で体調が変化しやすく、自分でコントロールすることのできない生徒が多いため、常に生徒の体調を把握し、作業量や作業時間を考慮するように努める。

(4) 実践例

氏名	作業に取り組み始めた頃の実態	平成3年7月の実態
K・M (高1女)	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者が抜いたものを引き抜く作業をしていたが抜いたものや材料をわざと投げることもある。 ・60分中作業に取り組み始めたのは、10分程度で、友達にちょっかいを出したり、ぼんやりしていることがほとんどで、時間内に3枚程度するのがやっとである。(平成3年4月) 	<ul style="list-style-type: none"> ・1枚ずつ自分で抜くことの面白さを覚え、調子の良いときは、60分間手を休めることなく作業を続けることができた。 ・時間内に30枚は出来るようになった。 ・ごみをきちんとごみ箱に入れることも出来るようになった。
A・O (高1女)	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者が抜いたものを引き抜く作業をしていたがほとんど材料を見ないで、手探りで作業をする。 ・自分で材料を持って作業をすることが難しく、指導者が作業しやすい位置に材料を持ち作業をする。 ・途中で手を止めたり、大きな声でしゃべったりすることが多い。(平成3年4月) 	<ul style="list-style-type: none"> ・まだ手探りでしていることはあるが、引き抜く作業はだいたい一人でできるようになった。 ・声かけにより、材料を見ることも出来だし、時間はかかるが、1枚ずつ自分で抜くことも出来るようになった。 ・「できました」の報告ができるようになった。
S・N (高2男)	<ul style="list-style-type: none"> ・椅子に座って作業することが難しく、すでに床に座ろうとしたり、よそ見が多く、友達にちょっかいを出したり、材料を投げたりする。 ・材料を破ってはいけないという意識がなく、材料を全く見ないで作業をし、すぐに破ってしまったり材料をなめることもある。(平成2年4月) 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間一杯椅子に座って作業ができるようになった。時々よそ見はあるがちょっかいを出すことはなくなり、集中できる時間も増えた。 ・不良品を出してはいけないという意識が高まり、材料をよく見て作業をし、作業が終る度に自分で点検することも出来るようになった。
St・Y (高3女)	<ul style="list-style-type: none"> ・椅子に座って作業することが難しく、すでに床に座ろうとする。 ・常に声かけを必要とし、かなりの時間かかって1枚を仕上げるが、すぐに飽きてしまい、自分の好きな掃除をしたがる。 ・掃除は丁寧にする。(平成2年4月) 	<ul style="list-style-type: none"> ・時々椅子から床に下りようとするが、だいたい時間一杯椅子に座って作業することができるようになった。 ・まだ声かけは必要であるが、引き抜く作業であれば、時間一杯続けることができ、かなりの枚数をこなすことができるようになった。
Sk・Y (高3女)	<ul style="list-style-type: none"> ・椅子に座って作業することが難しく、すぐに床に座ろうとする。 ・作業に見通しが持てず、少しやっっては休憩したりぼんやりしていることも多く、なかなか指示にも従おうとしない。体調の悪いときは全く出来ないこともある。(平成2年4月) 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間一杯椅子に座って作業することができるようになった。 ・声かけがなくても、自分で材料や道具を準備して、時間一杯作業に取り組むことができる。 ・とても紙工作業を好み、体調の悪い時でも、自分からしようとする。

(5) 考察及び今後の課題

取り組みを続けた結果、「紙工」という素材が本グループの生徒の実態に合っているので生徒たちもこの作業であれば興味を持ってどんどん取り組むことが出来るようになった。そして、この作業を通して、一つのことを一定の時間続けること、見通しを持って作業に取り組むことが出来るようになった。

しかし、働くということ意識するまでにはまだ至っていない。個々によって対応の仕方も違い、なかなか働く雰囲気にもっていきにくい面もあるが、出来るだけ周りで働く雰囲気を創り、この取り組みを続けていく中で、働く意識が育っていけばと考える。



紙工をするSk・Y

〈製作コース〉

(1) 生徒の実態

本コースの生徒は1年生2名、2年生5名、3年生3名計10名（男子6名、女子4名）である。ダウン症3名、自閉症2名、プラターウィリー症候群1名、構語障害1名、脳性麻痺後遺症1名、慢性腎炎1名と併せもつ障害は多様であるが、発達段階は5～6歳であり、集団としてまとまった活動や学習が可能である。高校生扱いされることを好みながらも、作業をやり通すのに多くの声かけや賞賛を必要としてきた生徒が多い。従って、周囲の雰囲気や指導者の態度に左右されて作業意欲や作業態度が崩れやすいという課題をもっている。

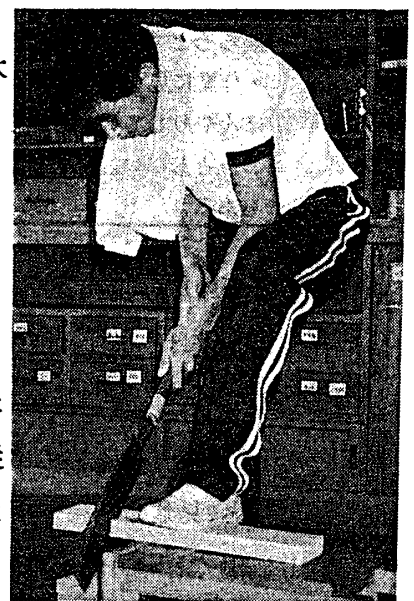
(2) ねらい

- 製品を意識した物づくりを通して、社会との関わりをもちながら、丁寧さや根気強さ、責任感等の作業態度を養う。
- 作業の全体像をある程度認識し、見通しをもって自分の役割や作業に取り組む。

(3) 方針と手だて

自分の作品としての物づくりにとどまっている生徒たちの実態においても、茶托などの規格化されたものは、機械を使うことによって製品化することが可能である。また、機械化することで量産も可能となり、社会における生産活動の一形態である作業の分業化が図れる。この分業化された仕事の中で自分の存在や役割を確認させ、活動全体を見通す力や責任感を培い、最後まで根気強く取り組んだり、正確に作業をこなすといった作業態度を育てたい。分業では工程を結ぶ人間関係が大事な要素となるので、社会性を養うことにもなると考える。従って、本コースでは機械を使つての「製品化」「分業化」を前提において、次のような方針と手だてを設定した。

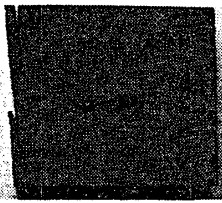
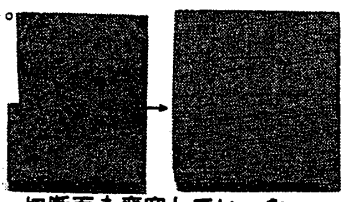
- ① 任された仕事に集中して取り組む雰囲気を意図的に作り、集団の力によって好ましい作業態度を養う。指導者は生徒を大人扱いし指導者の態度やことばかけも吟味する。
- ② 作業に見通しをもたせる。そのためにも、製品ができるまでの工程を全員に経験させる。その中で生徒の適性や課題を考慮し、役割を分担して分業で作業をすすめる。生徒が活動する作業場所は、工程に沿って配置する。
- ③ 常に「製品」を意識させ、従前の即売会で販売するといった程度にとどめず、商品として出荷・納品できるようにする。従って、社会との関わりを意識させながら、不良品を作らないようにしようという姿勢を育てる。
- ④ 「不良品」を作らないために、自分の作業の手順や作業技術のこざりを使つての切断等について、自分から「見てください。」「直してください。」と報告するようにさせる。



〔表3〕茶托づくりの工程と主な活動

工程	乾燥	けがき	切断	糸のこ	木工ろくろ	磨きⅠ	磨きⅡ	集計	納品、販売
活動	木材を乾燥させるように組んで置く。	長材に曲尺で12cm毎に線を引く。	線の上をのこぎりで切る。	12cm四方の板を円形に切る。	茶たくの形に削る。	サンドペーパーを使って滑らかにする。 粗みがき 中みがき 仕上げ	米ぬかを使って、つやを出す。	出来上がった数を調べる。	製品を箱詰めし、出荷する。

(4) 実践例 -H・Y (高2男) の変容-

題材	実態	手だて	取り組みの様子
木工具の使い方 4月	木工具が気に入り指導者の話が聞きとれない。勝手な行動をとり、注意を受けても直そうとせず、繰り返し注意を受けると活動場所を離れる。	あいさつ・返事はどの指導者にもきちんとさせる。基本的に妥協せず集団に加わらせる。	注意を受けることが多いためか、素直に指示に従おうとせず、自分のやりたいことをする。自分の我を通そうとして果たせない時は悪態をついて場所を離れた。人によって態度を変え、作業中もしゃべり続けであったが、徐々に思い通りに行かないことがわかってきた。
パズルの製作 5月	活動場所に遅刻してやってくる。遅刻してもなかなか報告ができない。注意を受けるとだんまりを通し、座り込む。	作業に危険が伴うことを知らせ真剣に学習に取り組む雰囲気づくりをする。	周囲の生徒たちの学習への取り組みが変わってくる。そのために友達同士でしゃべることが少なくなってきた。話す相手がいないので仕方なく黙って取り組んでいるので、賞賛を受けてもあまり嬉しそうな様子はなく、かたくなな姿勢が見られるようになった。
茶托づくり・切断 6月 7月	他の生徒たちに少しずつ合わせるようになり、私語が減ってきた。自分が認められていないという気持ちがあるからか、投げやりな言動も時として見られる。作業も意欲がなく、持続しない。 	指導者間の連携を密にし、担当者を明確にする。作業に集中して取り組む雰囲気を集団につくり、個別に本生徒に直接注意することは控える。励ましの声かけより、指示通りにできたことを賞賛するようにする。	不良品ができそうになる前に自分から報告するように要求すると、叱られることを警戒してなかなか報告できなかったが、技術面で注意を受けないことがわかると指示に従えるようになった。自分なりに自信が付き、注意しなくても最後まで作業に取り組むようになる。汗をかくことも気にならず、木を切断しても以前のように賞賛を求めて大声を出すことはなくなった。 

(5) 考察及び今後の課題

楽しい集団の雰囲気の中でなら作業に関わっていくことができる生徒たちに、働く意識を育てる手だてとして、集団の質や雰囲気を変えることから始めた。多くの生徒たちが、作業の手順を覚え自分にその作業ができるようになったことを喜ぶ段階にとどまっている。従って、全体としての仕事の目的をとらえて自分の役割や仕事を意識させ、加えて「不良品」を作らないということによって自分の苦手なところを克服しようとする姿勢を育てることは大事なことである。「製品」を意識した茶托づくりは本年度スタートしたばかりであるが、今後も生徒たちの抱えている課題に即して視点を変えながら、継続して指導していきたいと考える。

〈技能コース〉

(1) 生徒の実態

1年4名、2年2名、3年4名計10名で、うち男子5名女子5名で編成されている。多少情緒不安定な1年男子がいるが、全般的に障害が軽く、安定しているグループである。技能コース（活版印刷）班としての経験者は5名で、1年4名、2年1名の5名は、活版印刷に関しては初心者である。経験者の中で、リーダーシップがとれる者は3名であるが、印刷技能の習熟度が一番高い3年女子Nが、班長として自主的な活動を推進している。3年生同士のライバル意識が、向上心を高める上にも、下級生への指導に対しても良い効果をあげている。

(2) ねらい

印刷工程（受注→文選→組版→印刷→校正→本印刷→解版→返し→包装→納品）を学習する過程や通知表を製本する過程の中で、各工程の技術・好ましい作業態度・精神力等を身につけることにより〔労働〕を学びとることをねらいとしている。また、これらの学習活動に自主的に取り組もうとする意欲面を特に重視した。1連の作業工程が全てかかわりあって印刷物ができることを強調し、担当工程に責任を持つと同時にお互いに協力しあうことの大切さにも気づかせた。各工程の技術を習得する過程を、経験者と初心者がペアで取り組むことにより、経験者は教えることによって自分の技能をより確かなものにしようとし、また、初心者は早く先輩のようになりたいという意欲が高まるようにした。

(3) 方針と手だて

①. 各工程技能の習熟を目指す

- a. 経験者と初心者を組ませ、初心者に対する個別指導を徹底させる。
- b. 初心者に教えるためには、経験者グループの自己研修が重要であることを強調し、経験者の意欲を喚起する。
- c. 外注物（名刺、はがき）教材を多く受け、短期間で仕上げねばならない状況をつくり、緊張感の中で学習する場面を多く設定する。
- d. 校内職業実習（年賀状印刷・学校文集印刷）では、各工程を分担して受け持つことにより各工程技能の習熟を図る。
- e. 習熟度テストを各学期1度設けることにより、習熟への意欲を高める。

②. 自主的な学習態度を目指す

- a. 前時の反省会の時に次の学習内容を理解させておくことにより、印刷室に来るとすぐに自分の作業に取りかけられるようにする。
- b. 班長に事前に学習の流れを十分理解させておき、班長が指示できる内容を多く準備しておく。
- c. 作業の全体の流れを把握させることにより、今現在取り組んでいる作業の次に何をすべきかに気付かせ、自主的に取り組める条件を準備する。

③ 協力しあう作業態度を目指す

- a. 技能習得に関しては、初心者に対して先輩が1対1の個別指導を行う。
- b. 友達を手助けした場面を見つけ、みんなに素晴らしいことだと報告し協力することの意味を具体的に提示する。
- c. 協力することにより、素晴らしい製品が早くできたことを強調し、協力することの素晴らしさを実感させる。

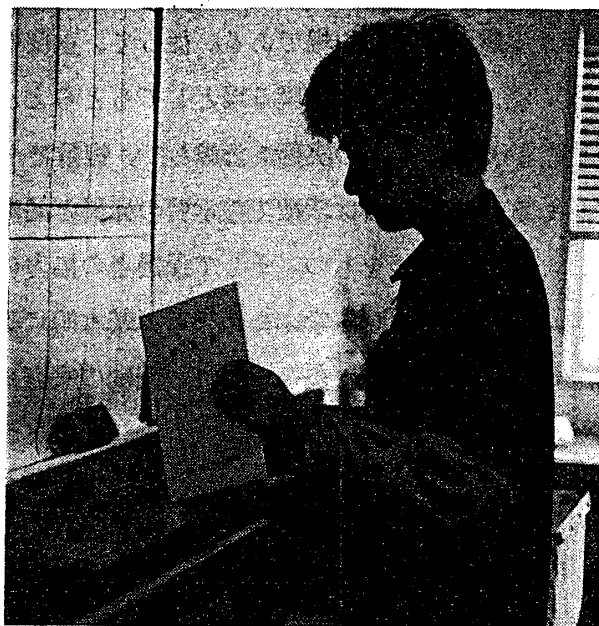
(4) 実践例『通知表の製本』

- ①. 製本数 小学部用：50冊 中学部用：50冊 高等部用：100冊
- ②. 製本工程 刷り→取り→折り→ホッチキスとめ→針叩き→裁断→糊付け（機械）→両面テープ貼り→表紙仕上げ→裁断仕上げ→納品

全10時間	取り組み当初	後半の取り組み
技能習得	<ul style="list-style-type: none"> ・ミスがでる。特に糊付け部分でのミスが目立つ。 ・材料の汚れが目立つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ミスなし。糊付け部分でのミスも全くなくなる。 ・材料の汚れもほとんど見られない。
自主性	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者の顔を見て、うなづいてもらってから取りかかることが多い。 ・やっていることに自信が持てない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・材料の準備から後始末まで、全て生徒だけで行う。 ・作業方法に工夫が見られる。
協力面	<ul style="list-style-type: none"> ・初心者の仕事の段取りが出来ず、自分のことが精一杯である。 ・仕事が流れてこないとただ待つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・初心者の仕事を準備し、穏やかに教える余裕ができる。 ・他の工程の手伝いをする。

(5). 考察

10名の作業能力に差のある生徒を1名の教員が指導する1つの方法として、常に経験者と初心者の2人組で学習に取り組ませたが、経験者にとっては自分を高めることの大切さが自覚できた点で効果があった。初心者についてはペアの相手に能力的な差があり、必ずしも全員に効果があったとは言い難い。しかし、「労働」を学び取る職業科のねらいはある程度達成できた。生徒の主体的な活動を中心とした今年度の取り組みも、からだづくりを通して培われた力が背景にあり、彼らの「やる気」を支えたからこそできたといえる。



通知表製本の様子

2. 現場実習による実践

(1) 生徒の実態

本校高等部生徒全員の実態は巻末「資料編」に示しているが、障害の重度、重複化に伴い事業所での現場実習が難しくなる傾向にある。職業科（コース制・共同作業・校内実習等）で、生徒たちは働くことへの意欲や好ましい作業態度を身につけるよう頑張っている。現場実習は日頃の実践の発展の場としても、経験の拡大を図る機会としても、どの生徒にも大事である。生徒たちの実態には大きな開きはあるが、働ける体力・持続力を養うこと、社会性を育てることは共通の課題となっている。

(2) ねらい

現場実習の目的は「一定期間、校外の作業所や事業所において、作業学習の機会を与えることによって勤労の意欲や喜びを体得させるとともに、生産活動を通して協調性や社会性を育成し、社会への自立に必要な資質を育成する。」ことにある。実習先の作業所や事業所を「すすんで生き生きとからだを動かす場」と考え、それぞれの場でからだを動かし働くことを通して、次のようなねらいの達成を図る。

- ・職場における基本的なルールを身につけさせる。
- ・適切な作業態度を身につけさせる。
- ・基本的な作業遂行力を身につけさせる。
- ・職場で適切な対人関係がもてる力を身につけさせる。

以上のねらいを達成させることは、将来の職業生活のみならず「社会参加」の基盤となると考える。



水産加工場で実習する生徒

(3) 方針と手だて

- ① 現場実習は、日々の実践を経て、生徒自らの体験を通して、自分と社会（環境）との関係を实际的に学ぶ場である。従って、重度であっても校外で作業する場を設定する。
- ② 経験の拡大を図る場としてもとらえ、できるだけ多くの業種を経験できるようにする。そのために生徒の実態を考慮して、複数で一つの実習場所に行かせることもある。
- ③ 現場実習は学校での学習の発展と同時に、家庭生活の発展の機会と考え、事前に各学年とも進路懇談をもつ。そして保護者の協力の下、通勤方法、持ち物等々について事前学習を行う。
- ④ 働く意味を学ぶためにも、基本的には実習先に合わせて、一日8時間の労働を経験させる。

但し、慢性腎炎等、生徒の個別の実態に即して実習時間を決める。

- ⑤ 高等部全教官が巡回指導を行い、多角的に生徒をとらえるようにする。一日1回連絡会をもつ。
- ⑥ 事前学習、事後学習を重視し、自分の適性や障害を認識させる。（～ができる、～に気をつける）

学年	生徒数	作業所	事業所
1	9人	7	2
	(%)	77.8	22.2
2	9人	3	6
	(%)	33.3	66.7
3	10人	3	7
	(%)	30.0	70.0
全体	28人	13	15

(4) 実践例

① 評価

次のような具体項目による評価を○△×で行い、実習後の課題をさぐる手がかりとしている。

項 目	2日	3日	4日	5日	6日	8日	9日	10日	11日	12日	13日	15日	総 評
1 遅刻をしない	○	○	○	○	○	休	み	○	○	午		○	実習の前半は緊張感があり、仕事にも持続力があつたようですが作業場の雰囲気が増えたようです。緊張感が持続出来れば後は訓練次第で作業も上達すると思います。
2 「おはようございます」が言える	△	×	×	△	△			×	×	後		△	
3 わからない時には、たずねる	×	×	×	×	×			×	×	よ		×	
4 失敗した時には、素直にあやまる	△	△	△	△	△			△	△	り		△	
5 敬語を使って、話ができる。	△	○	○	○	○			○	○	早		○	
6 仕事中には、雑談・よそ見等をしない	○	○	○	△	△			△	×	退		×	
7 「はい」と元氣よく返事ができる	△	△	△	△	△			△	△			△	
8 仕事中に、作業場を離れない	○	○	○	○	○			○	○			○	
9 禁じられた行為をしない	○	○	○	○	○			○	○			○	
10 根氣よく仕事をすることができる	○	○	○	△	△			×	×			△	
11 正確で丁寧に仕事を行う	○	○	○	○	○			○	○			○	
12 仕事の終了を報告し、次の指示を仰ぐ	△	×	×	×	×			×	×			×	
13 職場の人達と話の仲間になれる	△	△	△	△	△			△	○			○	
14 仕事後の後始末や掃除ができる	△	△	△	△	△			△	△			△	
15 帰りの挨拶ができる	○	○	○	○	○			○	○			○	

上記のように事業所側も実習生の将来にわたっての適性を考え、進路選択に関わって示唆を与えてくれる。上記の評価を受けた生徒は秋の現場実習では福祉作業所で実習を行った。

現場実習協力事業所は、実習協力のみの事業所と採用も考慮している事業所とに分類される。後者の事業所は非常に厳しい評価がなされる傾向があるが、加えて、その職場の人たちとの人間関係を心配される。そして、生徒を働かせることに関しては事業所側が工夫するので、生徒や学校にはコミュニケーション、自己表現する力を期待すると言われる傾向もでてきている。


② 現場実習における変容例 —H・Y（3年男）の場合—

a. 実態

- ・障害名——脳性麻痺後遺症
- ・性格・行動上の特性——明るく、人なつこい性格で友だちの面倒見もよい。周囲の雰囲気
に流されやすく、自分の意に反して問題行動につながることもある。

b. 現場実習の評価と生徒の様子、手だて

学年	実習先	実習評価（事業所）	生徒の様子と手だて
1年	光ビルサービス	・周りを観察することによって、仕事のだんどりがわかり積極的に取り組んだ。 ・仕事場や作業内容に変化がある仕事に向いている。 ・筋力が弱いと感じた。	・通勤方法、準備物等、母親の協力を求める。 ・中3の職場実習で他校の実習生と実習先（野村木工）で金銭の貸し借りのトラブルがあったので、余分なお金は所持させないようにする。 ・運動経験を増やし、特に筋力アップに努める。 ・実習で得た自信を生かし、人の言いなりにならず自主的に行動するよう指導する。

2年	光ビル サービ ス	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事がわからない時には尋ねるが、仕事が終わっても次の仕事を尋ねたり、報告することができない。 ・仕事に慣れてきて、よそ見や雑談することもある。 ・仕事はやや雑である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・素直であるが慣れてくると甘えが出てけじめがなくなる。対教師、対大人への態度ややりとりを日頃から意識させるようにする。 ・自信のつく仕事を与える。現場実習の経験を生かし、校内の大掃除などでは積極的にワックス掛けやポリッシャーを任せる。自分からすすんで掃除道具を扱おうとするようになる。 ・母親の協力がなかなか得られない。日常生活に関わること（洗顔、歯磨き等）まで学校に依頼してくる。現場実習先についても批判的であった。
3年	鳥取ビ ルクリ ーナー	 <p>壁ふきをするH・Y</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仕事は遅いがまじめに作業に取り組んでいる。 ・最初の頃は職場の人たちとの交わりがほとんどなかったが、担当の人を中心に少しずつ会話ができるようになった。 ・素直な性格が周囲の人たちから好感をもたれている。 ・卒業後の採用も考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・5月頃は自動車整備の仕事がしたいと言う。かなり勉強や実習をしないと車に傷をつけてしまうので自分にはなれないだろうとも言う。自分にできること、できないことを、同学年の他生徒に比べ、ある程度受けとめている。一方で清掃会社への実習に母親が批判的なこともあって自信を失くしてきている。 ・母親の不満の内容が、勤務時間に関わること、周囲の清掃会社への偏見であることがわかり、H・Yの適正を考えると粗大的な仕事が向いていることを話し、協力を求める。 ・業種は同じであるが実習先を変える。実習先へのあいさつには父親が同行するなど協力が得られる。実習中の働いている様子や実習先の方々のH・Yへの配慮や理解が保護者にも伝わり就労に向けて非常に積極的になる。 ・母親が日常生活に関わることも自分たちの責任としてとらえ、金銭の扱い、洗髪や着替えのことまで細かく気を配る。これまで保護者からあまり細かく指導を受けていなかったH・Yは、この保護者の変容を自分への期待と受けとめ、より以上に実習先での仕事に前向きに取り組むようになった。

H・Yの場合、自信のなさから友だちに迎合する傾向が強かったが、実習を何回か経験するうち自分にできること、できないことが認識できるようになり自信が生まれてきている。本事例で見逃せないのは保護者の変容である。子どもの障害を受け入れられるようになった親の姿勢が、H・Yにとっても最も大きな支えとなり自分自身への自信につながっている。

(5) 今後の課題

障害も多種多様になった本校の生徒たちが、今後どのように社会と関わっていくのか、保護者と真剣に話し合う機会となっているのが現場実習である。生徒個々が抱えている課題や適性に合った実習先を保障すること、そして抱えている障害を親子で認識し積極的に社会に関わっていこうとする意欲を育てられる実習となることを目指して努力していきたいと考える。